

[資 料]

中国における子どもの「からだのおかしさ」と生活状況の変化

—北京市および内蒙古自治区の場合—

賈 志 勇*・寺澤宏次**・阿部茂明***・正木健雄***

(平成9年5月12日受付, 平成9年6月23日受理)

Changes of Children's "Abnormalities in Physical Functions" and Living Conditions in China

—Case of Beijing and Inner Mongolia—

JIA Zhiyong, Koji TERASAWA, Shigeaki ABE and Takeo MASAKI

The purpose of this study was to make clear changes of children's "abnormalities in physical functions" and living conditions in China, the last 10 years.

Subjects were Kindergarten, elementary school, junior high school and high school teachers, Beijing and Inner Mongolia.

Research were carried out September 1995 in Beijing, and May 1996 in Inner Mongolia.

We researched by two questionnaires; one was about children's "abnormalities in physical functions" (43 questions: Masaki *et al.*, 1978), another was about living conditions.

The result were summarized as follows:

1) There were increasing children's "abnormalities in physical functions" were observed following the changes of national life in China.

2) Appearance rate of children's "abnormalities in physical functions" was difference between cities and countryside, by an age bracket level and by standard of school.

3) After this, we must study for checking children's "abnormalities in physical functions", based on situations about children's "abnormalities in physical functions".

1. 緒 言

1978年から中国は「改革, 開放」, 「経済中心」という政策へと変わり, 国民生活は次第に豊かになってきている。例えば, 中国における一人当たりの年間収入は, 1978年は175元, 1985年は447元, 1992年は947元と, 14年間に5.4倍以上に増えた。また, 食糧は1985年は1978年より57kg多く, 1992年は1985年より16kg減少している。中国における一人当たりの年間の肉の消費量は1978年は8.85kgであったが, 1985年は17.11kgとなり, 1992年には23.58kgとなった。7年間ごとに倍々に増えている¹⁾。これは全国平均値なので, 豊かな地方の人々には実際にはもっと多く消費しているものと考えることができる。このように1978年から中国の経済は急速に発展し, 生活様式も急速に変化してきた。

一方, 学校では, 1977年から一斉試験を開始した。小学校から大学まで, 重点学校と一般学校とに分け, 重点学校への入学率で学校評価が行われるようになった。そのため, 1977年からは「受験教育」の時代になったといわれている。

このような激しい生活の変化は, 子どものからだに対してどのような影響を及ぼしているのであろうか。1984年9月に, 当時日本体育大学大学院生の寺澤宏次が北京体育学院(現北京体育大学)に留学した際, 寺澤と賈は北京市において正木らが1978年に実施した子どもの「からだのおかしさ」の43項目²⁾の事象がどのように実感されているかについて調査をしようとして計画した。ところが, 学校の先生方からはこのような「からだのおかしさ」は中国の子どもたちには見られないので, 無意味な調査だといわれた。そこで教員の「実感」を調査す

* 北京体育大学, ** 信州大学, *** 日本体育大学学校体育研究室

表1 中国・北京市の子どもの「からだのおかしさ」ワースト5

1984年			1995年			
n=215			幼稚園	n=89		
1	(33) 奇声を発する	7.9		1	(31) 棒登りで足裏が使えない	43.8
2	(25) 低体温	7.4		2	(29) 手の不器用	33.7
3	(15) 背中ぐにゃ	5.1		3	(1) 転んで手が出ない	23.6
4	(14) 腹でっぱり	4.7		4	(27) ぬるぬるいやがる	22.5
5	(22) 朝からあくび	4.2	5	(28) はだしで歩けない	11.2	
n=147			小学校低学年	n=97		
1	(27) ぬるぬるいやがる	10.9		1	(2) まばたきがにぶい	41.2
2	(20) 懸垂が1回もできない	7.5		2	(4) 腹筋が反射的に緊張しない	21.6
3	(33) 奇声を発する	5.4		3	(3) ボールが目にあたる	17.5
4	(31) 棒登りで足裏が使えない	4.8		4	(8) オスグート・シュラッテル病	16.5
5	(36) 腰痛	4.1	5	(7) 夜関節が痛くて眠れない	13.4	
n=141			小学校中学年	n=88		
1	(31) 棒登りで足裏が使えない	3.5		1	(2) まばたきがにぶい	73.9
2	(20) 懸垂が1回もできない	2.8		2	(20) 懸垂が1回もできない	46.6
3	(11) 内股でよくころぶ	2.1		3	(3) ボールが目にあたる	29.5
3	(27) ぬるぬるいやがる	2.1		4	(31) 棒登りで足裏が使えない	17.0
3	(43) アレルギー	2.1	5	(22) 朝からあくび	12.5	
n=98			小学校高学年	n=78		
1	(20) 懸垂が1回もできない	3.1		1	(33) 奇声を発する	25.6
1	(33) 奇声を発する	3.1		2	(14) 腹でっぱり	15.4
3	(3) ボールが目にあたる	2.0		2	(22) 朝からあくび	15.4
3	(22) 朝からあくび	2.0		4	(31) 棒登りで足裏が使えない	12.8
3	(37) 脚気	2.0	5	(23) 授業中目がトロン	7.7	
n=154			中学校	n=152		
1	(2) まばたきがにぶい	60.4		1	(15) 背中ぐにゃ	3.9
2	(20) 懸垂が1回もできない	15.6		2	(5) すぐに骨折	2.0
3	(3) ボールが目にあたる	12.3		2	(8) オスグート・シュラッテル病	2.0
4	(27) ぬるぬるいやがる	11.7		2	(14) 腹でっぱり	2.0
4	(36) 腰痛	11.7	2	(19) 脊柱異常	2.0	
n=164			高校	n=144		
1	(2) まばたきがにぶい	59.8		1	(22) 朝からあくび	5.6
2	(20) 懸垂が1回もできない	11.0		2	(2) まばたきがにぶい	4.2
2	(27) ぬるぬるいやがる	11.0		3	(23) 授業中目がトロン	3.5
4	(24) 授業中目がトロン	9.8		4	(3) ボールが目にあたる	2.1
5	(22) 朝からあくび	6.1	4	(37) 脚気	2.1	

(表中の左の数字は順位, 右の数値は事象の出現率)

る方法を「事実」調査に切り換え, 園児・児童に最近2年間にこのような事象が見られるかどうか, もし見られれば何人くらいかということ, 生活状況の調査をお願いした対象者の担任教師に尋ねることにした。その後1985年5月に内蒙古自治区でも同じ調査を行った。また保護者には子どもの帰宅後の生活状況について尋ねた³⁾。

それから10年経って, 子どもたちの「からだの

おかしさ」はどのように変化したのだろうか。本研究では, その変化を明らかにするため, 再調査を行うことにした。

2. 研究方法

2.1 調査対象

北京市の北京師範大学附属

幼稚園

150名

内蒙古自治区達拉特旗

幼稚園

89名

表2 中国・内蒙古自治区の子どもの「からだのおかしさ」ワースト5

1985年			1996年			
n=125			n=150			
1	(14) 腹でっぱり	3.2	幼稚園	1	(23) 授業中目がトロン	8.0
1	(33) 奇声を発する	3.2		1	(33) 奇声を発する	8.0
3	(1) 転んで手が出ない	2.4		3	(2) まばたきがにぶい	5.3
4	(2) まばたきがにぶい	1.6		4	(1) 転んで手が出ない	4.0
4	(22) 朝からあくび	1.6		4	(27) ぬるぬるいやがる	4.0
4	(23) 授業中目がトロン	1.6				
n=128			n=89			
1	(31) 棒登りで足裏が使えない	21.9	小学校低学年	1	(37) 脚気	7.9
2	(26) あまり汗をかかない	12.5		2	(23) 授業中目がトロン	6.7
3	(2) まばたきがにぶい	3.1		3	(28) はだして歩けない	5.6
4	(14) 腹でっぱり	2.3		4	(15) 背中ぐにゃ	4.5
5	(23) 授業中目がトロン	0.8		4	(33) 奇声を発する	4.5
n=115			n=139			
1	(37) 脚気	3.5	小学校中学年	1	(2) まばたきがにぶい	83.5
2	(23) 授業中目がトロン	1.7		2	(26) あまり汗をかかない	69.1
3	(8) オスグート・シュラッテル病	0.9		3	(7) 夜関節が痛くて眠れない	34.5
3	(10) つまづいてよく転ぶ	0.9		4	(32) まっすぐに走れない	25.9
3	(22) 朝からあくび	0.9		5	(27) ぬるぬるいやがる	18.0
3	(31) 棒登りで足裏が使えない	0.9				
3	(33) 奇声を発する	0.9				
n=109			n=118			
1	(9) すぐ疲れて歩けない	2.8	小学校高学年	1	(22) 朝からあくび	2.5
1	(37) 脚気	2.8		1	(37) 脚気	2.5
3	(27) ぬるぬるいやがる	1.8		3	(26) あまり汗をかかない	1.7
4	(12) 踵がつかない	0.9		4	(36) 腰痛	0.8
4	(14) 腹でっぱり	0.9				
4	(38) 貧血	0.9				
n=191			n=170			
1	(22) 朝からあくび	6.3	中学校	1	(22) 朝からあくび	25.3
1	(37) 脚気	6.3		2	(23) 授業中目がトロン	24.7
3	(20) 懸垂が1回もできない	5.2		3	(2) まばたきがにぶい	21.8
4	(27) ぬるぬるいやがる	4.2		4	(27) ぬるぬるいやがる	17.6
5	(7) 夜関節が痛くて眠れない	3.7		5	(31) 棒登りで足裏が使えない	15.3
n=186			n=150			
1	(37) 脚気	5.4	高校	1	(22) 朝からあくび	35.3
2	(3) ボールが目にあたる	3.8		2	(23) 授業中目がトロン	30.0
2	(36) 腰痛	3.8		3	(27) ぬるぬるいやがる	22.0
4	(2) まばたきがにぶい	2.7		4	(37) 脚気	17.3
4	(33) 奇声を発する	2.7		5	(24) 授業中目がトロン	14.7

(表中の左の数字は順位、右の数値は事象の出現率)

小学校低学年	97名	小学校低学年	89名
小学校中学年	88名	小学校中学年	139名
小学校高学年	78名	小学校高学年	118名
中学校	152名	中学校	170名
高校	144名	高校	150名
計	709名	計	755名

2.2 調査時期

北京市 1995年9月

内蒙古自治区 1996年5月

2.3 調査項目

1984年に実施した調査と同様の項目で調査を実施した。

表3 北京市の子どもの睡眠状況

	学年	幼小	幼中	幼長	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
起床 (時刻)	84年	6.5	6.5	6.6	6.4	6.4	6.5	6.3	6.4	6.3	6.3	6.1	6.1	6.3	6.3	6.2
	95年	6.9	6.9	6.8	6.7	6.6	6.5	6.3	6.4	6.4	6.2	5.8	6.1	6.4	6.2	6.4
就寝 (時刻)	84年	9.2	9.2	9.2	9.2	8.1	9.2	9.2	9.2	9.2	9.2	9.2	9.2	10.2	10.2	10.2
	95年	9.3	9.5	9.6	8.9	9.0	8.9	9.1	9.1	9.1	9.6	9.8	10.3	10.4	10.3	10.9
昼寝 (時間)	84年	2.5	2.5	2.5	0.5	0.6	0.4	0.5	0.4	0.6	0.6	0.4	0.3	0.5	0.4	0.6
	95年	1.7	1.4	1.6	0.1	0.3	0.3	0.7	0.3	0.3	0.3	0.1	0.3	0.3	0.1	0.2
睡眠 (時間)	84年	11.9	11.9	11.9	9.7	10.8	9.8	9.7	9.7	9.8	9.8	9.3	9.3	8.6	8.5	8.7
	95年	11.3	10.8	10.8	9.9	9.9	9.9	9.9	9.6	9.6	8.8	8.1	8.1	8.2	8.0	7.7

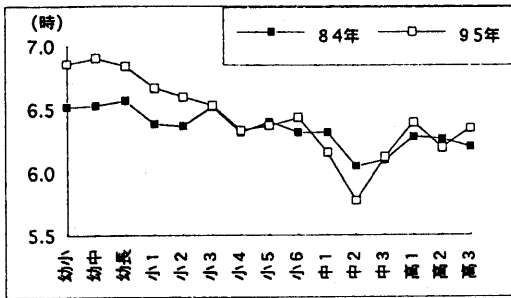


図1 北京市の子どもの起きる時刻の比較

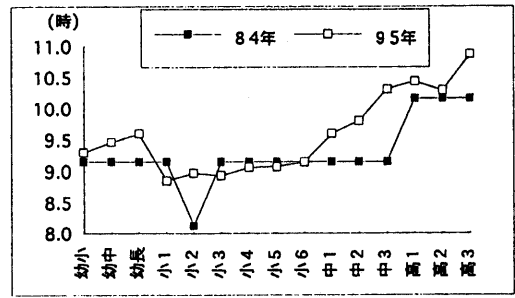


図2 北京市の子どもの寝る時刻の比較

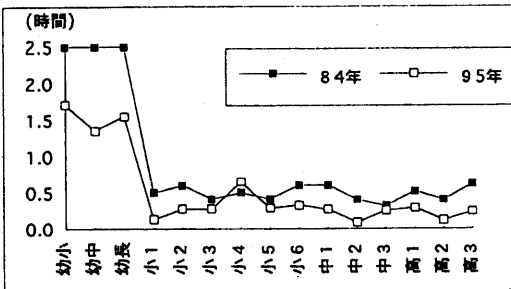


図3 北京市の子どもの昼寝時間の比較

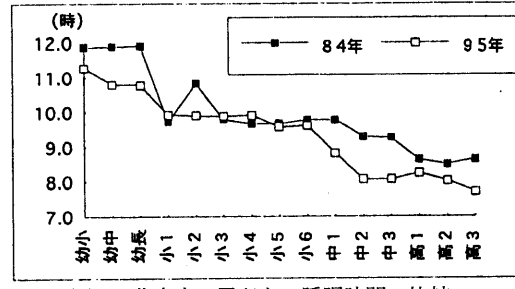


図4 北京市の子どもの睡眠時間の比較

3. 結果

北京市と内蒙古自治区において、11年前と同じ方法で教師の観察による子どもの「からだのおかしさ」の実数調査を行った。その結果を、頻度の多い順に第5位までの項目を学校段階別に示したものが表1、表2である。また、子どもの帰宅後の生活状況について、平均値の加齢的推移の変化を示したものが、表3から表7まで、および図1から図17までである。

4. 考察

表1に示した北京市の調査結果から分かるように、1984年には幼稚園から小学校高学年まで「からだのおかしさ」を示す事象の出現率が20%以上のものは見られなかった。中学校と高校では11年前「まばたきがない」はそれぞれ60.4%、59.8%であったが、その他の事象はすべて出現率が20%以下であった。ところが、1995年の北京市の幼稚園から小学校高学年までで「からだのおかしさ」を示す事象で出現率が20%以上のものは、幼稚園では「棒登りで足裏がつかえない」(43.8%)、「手の不器用」(33.7%)、「転んで手が出ない」

表4 北京市の子どもの勉強とテレビ、ラジオの視聴時間(時間)

	学年	幼小	幼中	幼長	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
勉強する時間	84年	0.5	0.6	0.7	1.4	1.4	1.7	2.5	2.1	2.4	3.4	2.3	2.2	2.7	2.1	3.1
	95年	0.7	0.7	0.8	1.1	2.1	2.1	2.5	3.3	3.2	2.7	2.9	4.3	2.8	2.8	3.9
テレビを見る時間	84年	1.0	1.1	1.2	0.7	1.4	0.8	0.9	0.8	0.8	0.4	0.8	0.7	0.9	0.4	0.2
	95年	1.0	1.1	1.5	0.8	0.9	1.0	1.0	0.9	1.2	0.8	0.9	0.8	0.6	0.9	1.0
ラジオを聞く時間	84年	0.2	0.3	0.2	0.4	0.7	0.6	0.7	0.8	0.9	0.8	0.6	0.7	1.4	0.6	0.6
	95年	0.4	0.2	0.3	0.2	0.3	0.3	0.7	0.4	0.4	0.3	0.5	0.6	0.5	0.3	0.6

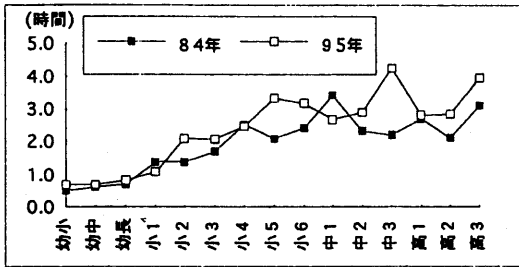


図5 北京市の子どもの勉強時間

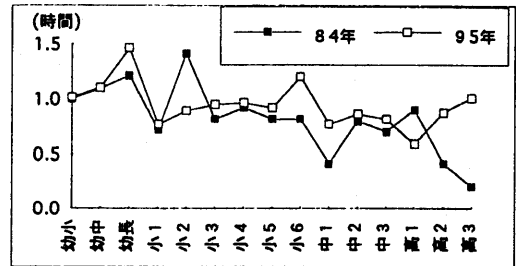


図6 北京市の子どものテレビを見る時間

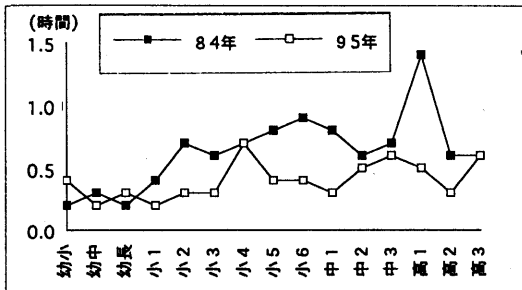


図7 北京市の子どものラジオを聞く時間

(23.6%), 「ぬるぬるいやがる」(22.5%), 小学校低学年では「まばたきがにぶい」(41.2%), 「腹筋が反射的に緊張しない」(21.6%), 小学校中学年では「まばたきがにぶい」(73.9%), 「懸垂が1回もできない」(46.6%), 「ボールが目にあたる」(29.5%), そして小学校高学年では「奇声を発する」(25.6%)であった。近年の「からだのおかしさ」のワースト1は、幼稚園「棒登りで足裏がつかえない」、小学校低学年、小学校中学年「まばたきがにぶい」、小学校高学年「奇声を発する」であり、運動系・神経系の事象が多くなってきていることが注目される。

さらに、1995年の北京市の中学校と高校では「からだのおかしさ」の出現率が11年前と比べて大きく減少していることも注目される。今回調査した中学校と高校は北京市の重点学校であり、入学試験が難しく、徳、知、体が全面的に発達していない子どもは入学ができない。

これらの優秀な子どもたちには「からだのおかしさ」が出現しにくい状況があるものと推察する。

一方、表2に示したように内蒙古自治区では、1985年の調査において「からだのおかしさ」の出現率が20%以上の事象は小学校低学年の「棒登りで足裏が使えない」(21.9%)のみであった。ところが1996年の調査では「からだのおかしさ」の出現率が20%以上の事象は小学校中学年では「まばたきがにぶい」(83.5%), 「あまり汗をかかない」(69.1%), 「夜関節が痛くて眠れない」(34.5%), 「まっすぐに走れない」(25.9%), また中学校では「朝からあくび」(25.3%), 「授業中目がトロン」(24.7%), 「まばたきがにぶい」(21.8%), さらに高校では「朝からあくび」(35.3%), 「授業中目がトロン」(30.0%), 「ぬるぬるいやがる」(22.0%)であった。

このように内蒙古自治区においても、近年「からだのおかしさ」は多くの子どもたちに観察されるようになってきているが、これらの内容には、運動系のみならず大脳活動水準の低下や体調不良の事象が多くなってきていることが注目される。さらに、内蒙古自治区における1996年の結果で注目されるのは、幼稚園と小学校低学年、小学校高学年での出現率が11年前とほぼ同じであったことである。この10年間で子どもの生活環境が変わった家庭もあるが、変わっていない家庭もあると考えられるが、なぜ、これらの年齢集団において、このような結果になったのかについては今のところ不明であ

表5 北京市の子どもの遊ぶ場所

	学年	幼小	幼中	幼長	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
外	84年	13.2	32.5	40.0	51.3	67.5	59.0	72.5	66.7	57.5	47.4	47.5	42.5	52.5	47.5	57.5
	95年	30.3	22.2	46.2	30.2	41.0	68.3	90.5	47.4	54.1	45.0	27.5	29.3	50.0	42.5	17.9
外と家	84年	39.5	35.0	32.5	33.0	17.5	20.5	5.0	2.6	27.5	23.7	30.0	40.0	40.0	27.5	5.0
	95年	54.5	55.6	38.5	34.9	28.2	19.5	0.0	10.5	18.9	7.5	17.5	14.6	10.0	22.5	17.9
家	84年	47.4	27.5	27.5	15.4	15.0	15.3	17.5	28.2	12.5	18.4	20.0	17.5	5.0	17.5	17.5
	95年	15.2	22.2	15.4	34.9	30.8	12.2	9.5	42.1	27.0	47.5	55.0	56.1	40.0	35.0	64.1

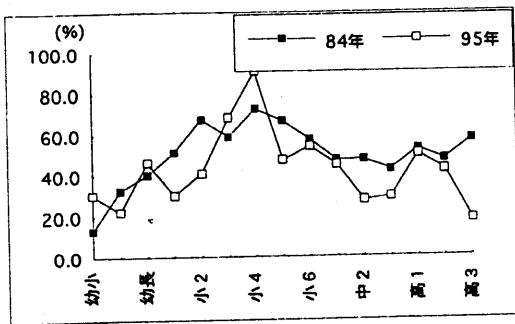


図8 北京市の子どもの外での遊び

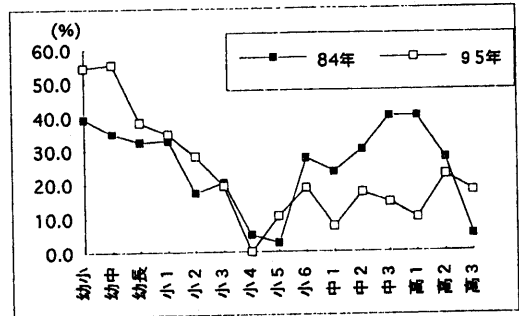


図9 北京市の子どもの外と家での遊び

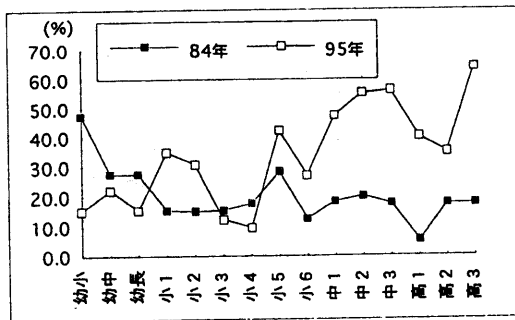


図10 北京市の子どもの家での遊び

り、今後、出現率の推移を見守るとともに、これらの原因を究明することが必要であると考えます。

以前の子どもたちは家に帰って、親の手伝いをしたり、兄弟や近所の子どもと外で遊んだりしていた。特に、農村の子どもは農作業をよく手伝っていた。しかし、近年、生活が豊かになり、何でも便利になってきた。さらに、中国では「一人っ子」政策により、親は子どもを大事にするようになり、時には過保護になり、これまでのように子どもが体を動かすということはだんだんと少なくなってきている。このような生活の変化の中で、子どもに「からだのおかしさ」といわれる事象が多く出現するようになったと考えます。

北京市の子どもの睡眠状況については、表3ならびに図1から図4までに示した。これらの図表から分かるように、北京市では11年前と比べて朝は遅く起き、夜は遅く寝るように変化し、昼寝の時間は減少している。睡眠時間の減少ということが最近の変化の特徴である。

家での勉強時間については、表4ならびに図5に示した。これらの図表から分かるように、小学校高学年、中学校3年生、高校2、3年生は11年前より家での勉強時間が増加しており、特に中学校3年生では11年前より2時間6分も多くなっていることが注目される。これは進学のために試験があるからと考える。しかし、他の学年では11年前と家での勉強時間はほぼ同じであり、今のところ試験の前年のみこの影響が現れていることが分かる。

テレビとラジオの視聴時間については、表4ならびに図6,7に示した。これらの図表から分かるように、いくつかの学年では増加していたが、減少した学年もあった。

北京市における子どもの遊びの場所については、表5ならびに図8~10に示した。これらの図表から分かるように、小学校5年生から「外、外と家」での遊びの割合が減少し、「家」の中での遊びの割合が増加した。

一方、内蒙古自治区の子どもの睡眠状況については、

表6 内蒙古自治区の子どもの睡眠状況

	学年	幼小	幼中	幼高	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
起床 (時刻)	85年	6.8	6.9	6.9	6.8	6.4	6.3	6.2	6.3	6.2	6.3	6.2	6.9	6.9	7.0	7.0
	96年	7.1	7.0	6.9	6.5	6.5	6.4	6.4	6.3	6.1	6.1	6.2	6.0	5.8	5.8	5.5
就寝 (時刻)	85年	9.1	9.3	9.2	9.4	9.3	9.3	9.4	9.3	9.2	9.3	9.7	9.8	9.7	9.8	10.0
	96年	9.3	9.2	9.2	8.9	8.9	9.0	8.9	9.0	9.2	9.3	9.6	9.8	10.5	10.5	11.1
昼寝 (時間)	85年	1.0	0.8	0.8	0.7	0.8	1.0	0.8	0.7	0.9	0.9	0.8	0.9	1.0	1.0	0.9
	96年	1.3	1.1	1.0	1.1	1.0	1.2	1.3	1.3	1.3	1.1	1.1	0.9	1.3	1.3	1.3
睡眠 (時間)	85年	10.7	10.4	10.5	10.1	9.9	10.0	9.7	9.7	10.0	9.9	9.3	9.0	9.2	9.2	8.9
	96年	11.0	10.8	10.6	10.7	10.5	10.6	10.8	10.6	10.2	9.9	9.7	9.2	8.6	8.6	7.7

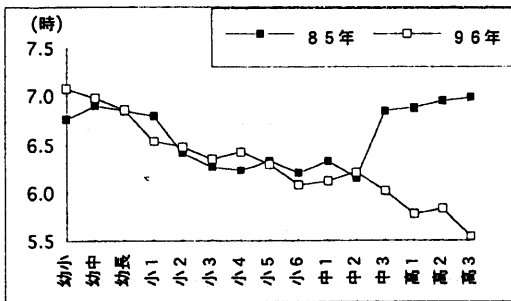


図11 内蒙古自治区の子どもの起きる時刻の比較

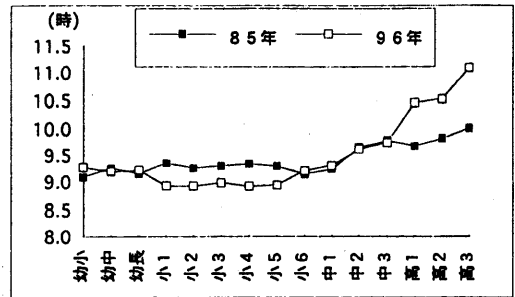


図12 内蒙古自治区の子どもの寝る時刻の比較

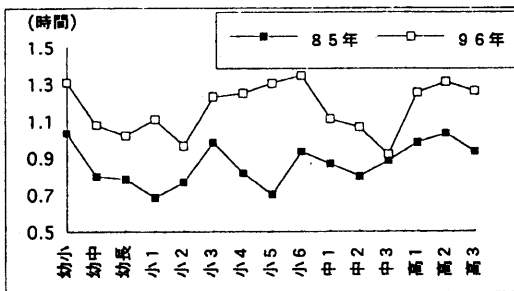


図13 内蒙古自治区の子どもの昼寝時刻の比較

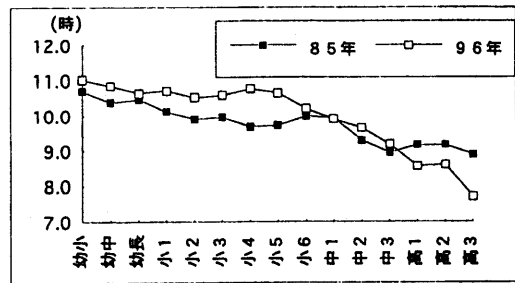


図14 内蒙古自治区の子どもの睡眠時間の比較

表6ならびに図11~14に示した。これらの図表から分かるように、起きる時刻では11年前と比べて、幼稚園児から中学校2年生まではほぼ同じであったが、中学校3年生から高校3年生までは早起きとなり、寝る時刻が高校では11年前よりも遅く、昼寝は全体として以前より増加していた。これらの結果より、睡眠時間は幼稚園から中学校3年生までは増加していたが、高校では減少していた。

家での勉強時間については、表7ならびに図15に示した。これらの図表から分かるように、11年前よりも家での勉強時間は増加していた。この原因として、「受験教

育」の時代になっているということに加えて、日本同様中国でも1996年5月1日から週二日休みの制度が開始されたことにより、子どもが自宅にいる時間が多くなったため、自宅での勉強時間も睡眠時間も増加したものと考えられる。

テレビとラジオの視聴時間については、表7ならびに図16, 17に示した。これらの図表から分かるように、いくつかの学年では増加していたが、中学校3年生と高校生は減少していた。

なお、本報では10年間に大きな差のなかった生活のことについては略した。

表7 内蒙古自治区の子どもの勉強とテレビ、ラジオの視聴時間（時間）

	学年	幼小	幼中	幼長	小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3	高1	高2	高3
勉強する時間	85年	0.1	0.4	0.6	0.7	1.4	1.6	1.6	1.4	1.8	2.0	2.3	1.9	1.9	2.0	1.7
	96年	0.9	0.8	1.0	1.7	1.7	2.2	2.0	2.2	2.4	2.4	2.3	3.1	2.6	2.4	3.3
テレビを見る時間	85年	0.9	1.3	1.4	1.6	1.3	1.4	1.4	1.0	1.7	1.2	1.2	1.7	1.4	1.6	1.5
	96年	1.3	1.3	1.6	1.2	1.2	1.3	1.5	1.4	1.4	1.6	1.6	1.3	1.0	1.0	0.9
ラジオを聞く時間	85年	0.1	0.2	0.2	0.3	0.5	0.5	0.4	0.7	1.3	0.6	1.1	1.5	0.6	1.8	1.6
	96年	0.4	0.2	0.3	0.4	0.3	0.7	0.8	0.8	0.8	0.6	0.5	0.5	0.4	0.6	0.6

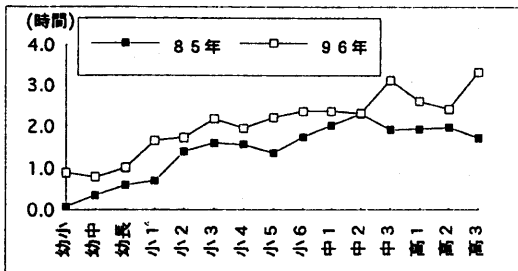


図15 内蒙古自治区の子どもの勉強時間

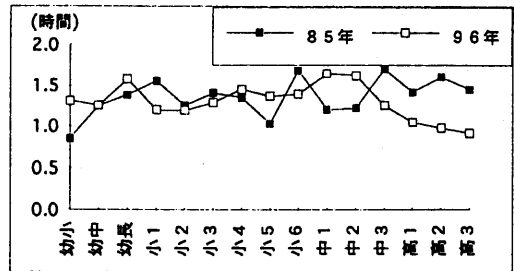


図16 内蒙古自治区の子どものテレビを見る時間

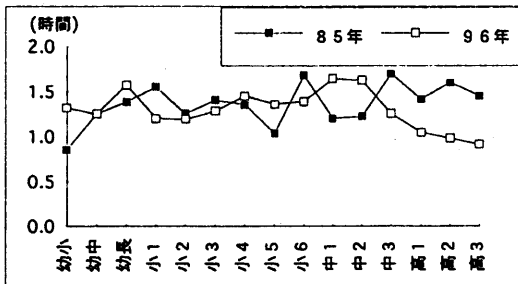


図17 内蒙古自治区の子どものラジオを聞く時間

5. 要 約

中国において、近年国民の生活が豊かになってきている。これに伴って、日本でみられているような子どもの「からだのおかしさ」という事象が多く観察されるようになってきた。全く日本の後を追いかけているようであり、中国の子どもも正木らが問題にしている「からだは触まれている」^{4,5)} という状態になりつつある。しかしながら、まだ現在の階段では都市と田舎とはこれらの出現率に差があり、また年齢階段あるいは学校の水準によっても差がみられる。さらに同じような生活状況の中でもからだのおかしさを示す子もいれば、そうでない子もいることが予想される。したがって、これらの差の原因究明にこだわり、生活が豊かになっても、子どものからだに変化が出てこないようなまい対策や方法を発見

して、子どものからだの変化をくいとめることが中国における今後の大きな研究課題であると考えられる。

謝 辞

まず、本調査にご理解をいただき、ご協力いただいた幼稚園、小学校、中学校、高校の方々に厚く御礼を申し上げます。またこの研究をまとめるために賈 志勇が日本国際教育協会の「帰国外国人留学生短期研究費」の援助を受け、「外国人研究者」としての機会を提供して下さった日本体育大学大学院保健体育科教育学研究室主任山田良樹教授はじめ、データ処理を手伝っていただいた野井真吾助手、学校体育研究室野田 耕助手に厚く御礼を申し上げます。

文 献

- 1) 中国統計年鑑, 中国統計出版社, pp. 256-257, 1995年.
- 2) 正木健雄: 子どもの体力, 大月書店, 東京, pp. 66-67, 1979年.
- 3) 寺沢宏次, 賈 志勇: 子どもの大脳活動についての研究, 北京体育学院学報, 北京, No. 10, pp. 45-48, 1986年.
- 4) 正木健雄・野口三千三編: 子どものからだは触まれている, 柏樹社, 東京, 1979年.
- 5) 正木健雄編: 新版・子どものからだは触まれている, 柏樹社, 東京, 1990年.